

第2節 土偶・土製品

1. 土偶

土偶は21点あり、後期中葉から晩期前葉の資料で構成されている。後期中葉に属するものは、第8図～第9図6で、第8図-1の顔面は山形土偶に一般的な眉状をなす隆帯の貼付が無く、頭頂部付近から鼻をなす隆帯を貼付し、その両脇に竹管状工具による刺突で目を表現する。この鼻を表現した貼り付けには刺突による鼻孔表現を伴う。口は横長の刺突で表現され、その内部と口の周囲に竹管状工具による刺突を充填する。顔面両脇には穿孔により耳が表現されていたが、欠損しており、現在はその一部が残存する。後頭部は瘤を伴わず平坦をなす。首の周囲と両胸の間には竹管状工具による刺突が施される。この刺突は目に施されたものよりも小さく、口に施されたものと同サイズである。頭部や胴部における無文部は、全面にわたって入念なミガキ調整が施される。

2は、多くの山形土偶にみられる後頭部の貼り瘤と、直線をなす眉状の隆帯や円形の貼り付けによる口表現を伴う一方で、目の表現は先端が筋状をなす工具による沈線表現であり、省略されることが多い鼻孔表現も見られるなど、典型的な山形土偶と比較すると細部に違いが認められる。

3～5は胴部や胴下半を中心としたもので、3は腰回りに鋸歯状の沈線が2段にわたって描かれる。4は胴下半から左脚にかけての資料で、腹部を表現した貼り付けを欠損する。本資料は腹部を板状の粘土で作成した後、脚部と接合した状況を割れ口から観察することができる。山形土偶の製作過程を考察する上で注目すべき資料である。

5は腹部から腰部にかけての資料で、股や左足の付根部に鋭利な工具による沈線文が描かれる。左足の付根の沈線文は、上下に対抗する弧線文を描き、その左右に「く」字文が充填される。

当該期に属する腕部は3点（第8図-6～8）、脚部は6点（第9図-1～6）ある。

第8図-6は肩と腕部に刻列を伴う資料で、節の粗い原体によるLR縄文を施文する。7は肩部に2条の沈線を施文する。8は左胸から左腕にかけての資料で、胸部は半月状の瘤で表現される。瘤の右側は、板状工具をあて、左腕部にむけて水平面が作出され、その後3条の沈線と縄文が施文される。こうした作出方法は、曾谷～安行1式の平縁深鉢の口縁部に見られる製作技術と共通する。

第9図-1は足首に沈線が1条周回する資料で、つま先には押捺を伴う。2は足首に刻列を施文する。全面に縄文LRが施文される。3も足首に沈線が1条周回し、全面ナデ調整を施す。4は足首に2条の沈線を周回させる。5は腕部として図化されているが、脚部であろう。先端は欠損するものの先細る形状で、足首ではなく付根部分に沈線を2条周回させる。6は円柱状を呈し、沈線の交点部に刺突を伴う。脚として報告したが、詳細は不明である。

後期後葉から晩期前葉に属するものは、第9図-7～9および第10図-1～4で、第9図-7は縄文を施文した隆帯で顔面を囲んでおり、ミミズク土偶の顔面表現が定着しているものの、目の表現は山形土偶に近い横楕円形の貼り付けで、完全な円形となっておらず、古相を示す。また目の周囲や顔面全面を充填する刺突列沈線と耳部に施される穿孔も本時期が古相であることを示す。

8は耳部のみを残存する頭部片であり、それまで穿孔で表現されていた耳部が円形のボタン状貼り付けに変化する。

9は7に比べて、目の表現が円形の貼り付けに変わるとともに、目や口のボタン状貼り付けの上に刻列を施文しており、より新しい特徴を備える。また顔面全面に施文されていた刺突列沈線も、頬や目と口の周囲に限定される点も新しい特徴を示す。そして、欠損する耳部にはおそらく、目や口と同

様の上部にキザミ表現を伴う円形のボタン状の貼り瘤が伴うであろう。

胴部資料は第10図-1と2で、1は腹部から脚部にかけての資料で、腹部には周囲にキザミを伴う円形の瘤が貼付され、それを基点に上部は両脇から肩部、下部は内股にかけてX字状の稜線が形成される。また腹部にある円形の瘤から上に向かって、正中線に相当する隆帯を伴う。

一方の2の胴部は、膨らんだ腹部から上に伸びる正中線を表す隆帯が消失しており、より新しい様相を示す。

3と4は脚部である。共にそれまで隆起していた内股部は平板化し、刻みが施される。より新しい様相を示し、晩期前葉に伴うであろう。

このようにミミズク土偶においては、頭部、胴部および脚部それぞれにおいて時期差を確認できる。

2. 耳飾り

耳飾りは5点ある^{〔註1〕}。これらは後期中葉から晩期前葉にかけての資料である（第4表）。2点は直径2cmに満たない無文の魚椎骨形を呈した小型品であり、後期中葉に属するであろう（千葉 図1-10・11）。ともに全面に赤彩が確認できる。中央に穿孔を伴い、周囲に弧状の隆帯を4単位で貼り付けた（第4表C10-1）は、後期後葉安行式期に伴うものである（千葉 図1-7）。

大型環状品のC5（第10図-5）は、渦巻きとI字状の単位文を交互に4単位で配置し、その間を三叉状の沈線で連結する文様を伴う。晩期前葉に属するであろう。1912年刊行の『人類学雑誌』第28巻第4号において、高島所蔵資料として3点が「口絵・雑報」において紹介されており、その内の1点为本資料である。1912年時点と比較すると修復の状況が異なっている。同雑誌に掲載されていた他の2点は、大阪歴史博物館の中には見いだせなかった。他に1点、環状の無文品があるが全体的に摩耗が著しい。

3. 土錘

土錘は8点あり、丸玉状のものが3点、管玉状のものが5点ある。余山貝塚の貝塚部分に近接する東側の台地上からは、古墳時代を中心とした遺構・遺物が多く検出され、奈良・平安時代にかけての遺物も少量検出されている。したがって、これらの土錘は古墳時代以降に属する可能性が高い。

4. その他

耳飾りとして一覧表に掲載されている（第4表C19-3）は、中央に穿孔を有し、上下面平坦な無文品であり、一見後期中葉の耳飾りと上面観は類似しているが、通常緩く括れることが多い側面部には2条の溝が周回し、その間が突出しており、耳飾りとして着装するには不向きな形態をなす。用途不明品である。

（吉岡卓真）

【註】

（1）耳飾りについて、図のない資料は下記参考文献中の図を参照していただきたい。なお、参考文献中の図を用いる場合、該当資料の説明の文末を（千葉 図1-○）とした。

【参考文献】

財団法人千葉県史料研究財団 2004「土製品・石製品収集資料」『千葉県の歴史 資料編 考古4（遺跡・遺構・遺物）』;p.1270

第3表 土偶

(単位: mm)

管理番号	枝番	遺跡名 注記	種別	部位	長さ	幅	文様要素	その他の特徴・備考
B011		余山	山形?	頭部~胴部	(66)	(65)	竹管状工具による刺突・丁寧なミガキ	目の刺突のみやや大きい工具・耳孔表現あり・鼻孔表現あり・左腕接合面で剥落
B017		余山	ミミヅク	頭部	(93)	(89)	沈線+沈線内刺突	意図的に周縁部打ち割り?
B018		余山	ミミヅク	頭部	(45)	(66)	沈線+沈線内刺突+縄文 (RL)	頭頂部接合面で剥落
B019		余山	山形	頭部	(36)	(52)	半截竹管	目半截竹管腹側で表現・鼻孔表現あり
B042		余山	ミミヅク	胴部~脚部	(88)	(78)	沈線+縄文 (RL)	胴上半接合面で剥落
B043		余山	山形	胴部	(39)	(39)	沈線・ナデ	小形・両胸剥落
B067		余山	ミミヅク	胴部	(71)	(97)	沈線+縄文 (RL)	赤彩
B074	1	余山	ミミヅク	左耳	(41)	(38)	沈線・刻み	赤彩・耳飾表現あり
B074	2	余山	山形	左胸~左腕	(52)	(58)	沈線+縄文 (LR)	乳房縦長の瘤
B074	3	余山	山形	腕	(40)	(42)	沈線+刺突+縄文 (LR)	
B074	4	余山	山形	腰	(65)	(66)	沈線・ミガキ	腹部剥落。接合 (接合部分に空洞)。
B074	5	余山	山形	脚 (右?)	(48)	(30)	沈線・ミガキ	足全周に押捺
B074	6	余山	山形	左脚	(52)	(28)	沈線+刺突+縄文 (LR)	赤彩・接合面で剥落
B074	7	余山	山形	腰~左脚	(70)	(52)	沈線+縄文 (LR?)	腹部剥落・隆帯+刻みで正中線・接合面で剥落
B074	8	余山	山形	腕	(39)	(32)	沈線・ナデ調整	
B074	9	余山	?	脚?	(36)	(26)	沈線+沈線内刺突	カルシウム付着
B074	10	余山	山形	脚	(42)	(27)	沈線・ナデ調整	接合面で剥落
B074	11	余山	山形	脚	(47)	(31)	沈線・ナデ調整	接合面で剥落
B074	12	余山	山形?	脚	(48)	(38)	沈線・ナデ調整	接合面で剥落
B074	13	余山	ミミヅク	脚	(33)	(29)	沈線+刻み	
B074	14	余山	ミミヅク	右脚	(36)	(24)	沈線+縄文 (RL) +刻み	

* () は現存最大値を示す

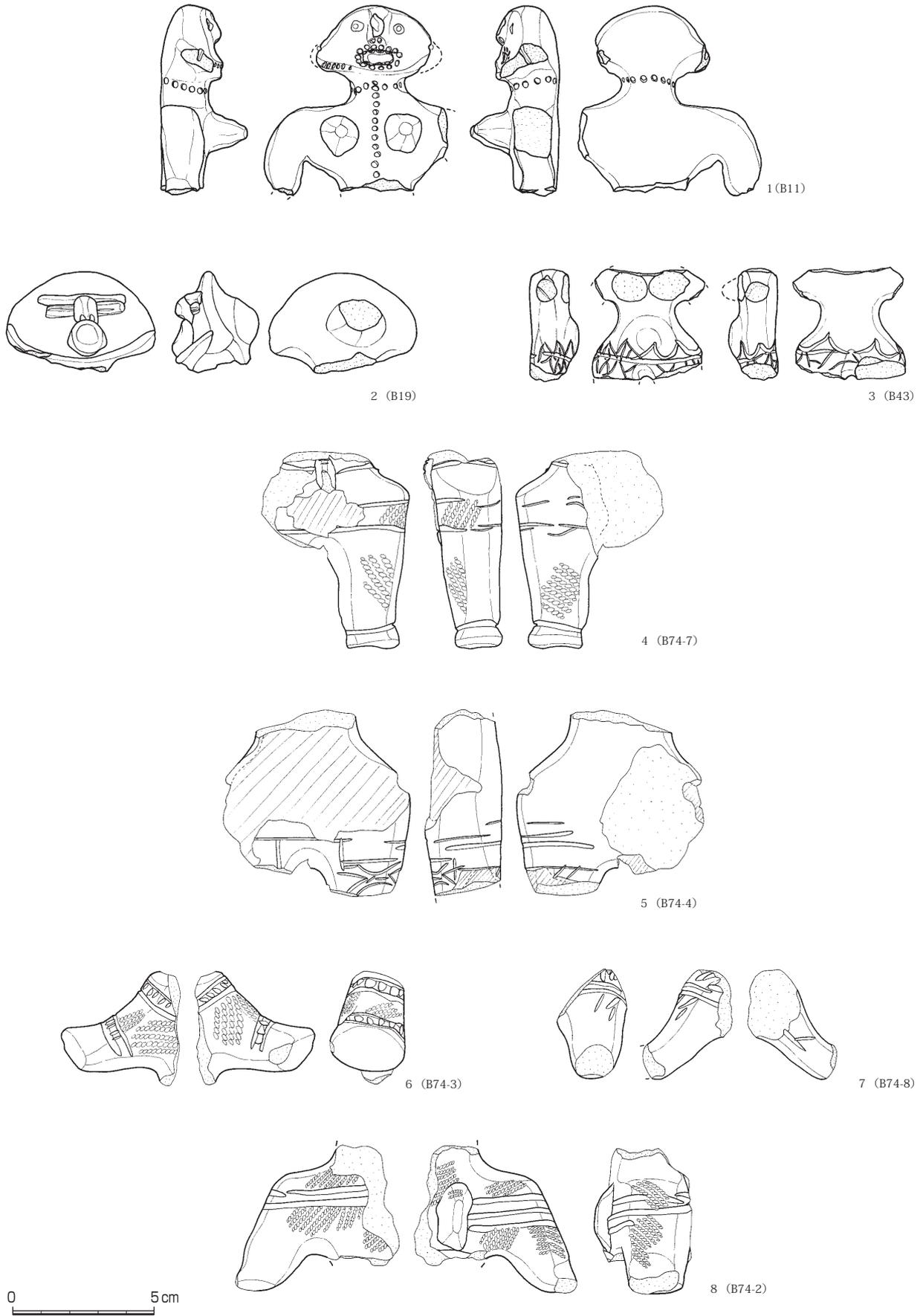
第4表 土製品

(単位: mm)

管理番号	枝番	遺跡名 墨書	墨書位置	器種	器長	器幅 (直径)	文様要素	その他の特徴・備考
C05		余山	側面	耳飾	82	85	沈線、キザミ	リング形。高さ 11mm
C10	1	余山	側面	耳飾	41	41	隆帯	穿孔あり。
C10	2	余山	側面	耳飾	26	26		リング形。
C19	1	余山	側面	耳飾	8	12	赤彩	
C19	2	余山	側面	耳飾	14	17	赤彩	
C19	3	余山	表面	耳飾か		19		穿孔。側面に突出部あり。
C20 ~ 21 (※)	15	余山	表面	土錘 (丸玉)	24	32		
C20 ~ 21 (※)	16	余山	表面	土錘 (丸玉)	32	27		
C20 ~ 21 (※)	17	余山	表面	土錘 (丸玉)	(27)	46		片面を 1/2 程欠損。
C20 ~ 21 (※)	18	余山	表面	土錘 (管玉)	26	11		
C20 ~ 21 (※)	19	余山	表面	土錘 (管玉)	40	27		
C20 ~ 21 (※)	20	余山	穿孔部内 面	土錘 (管玉)	53	(32)		1/2 欠損。
C20 ~ 21 (※)	21	余山	表面	土錘 (管玉)	70	41		両端の一部欠損。
C20 ~ 21 (※)	22	余山	表面	土錘 (管玉)	123	64		

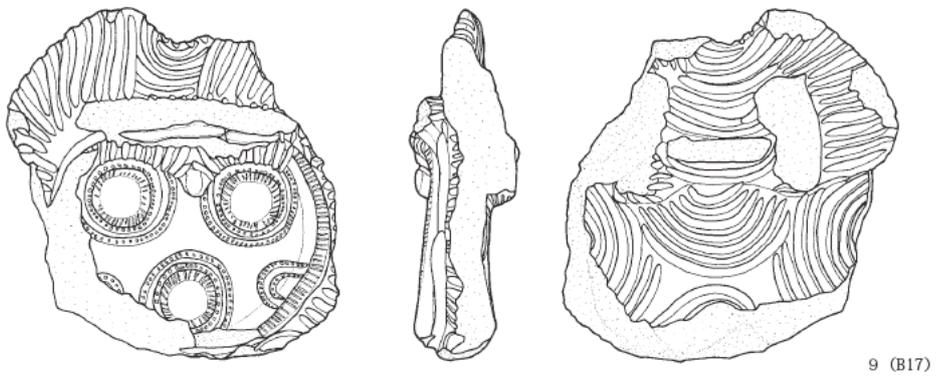
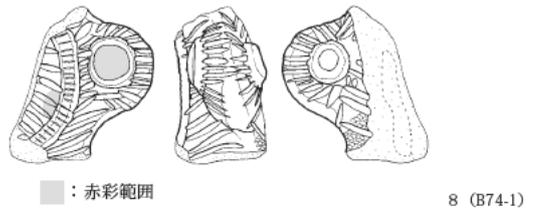
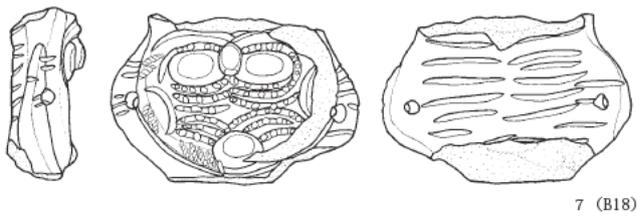
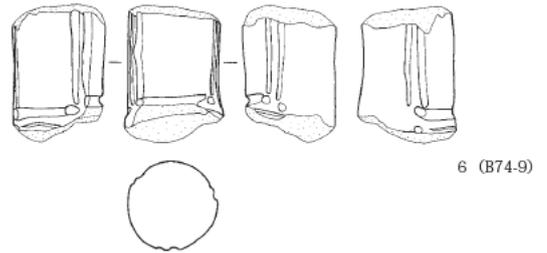
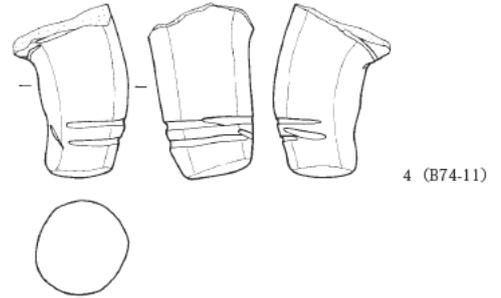
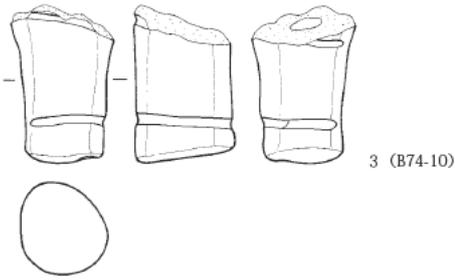
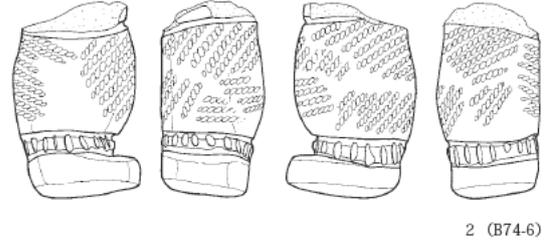
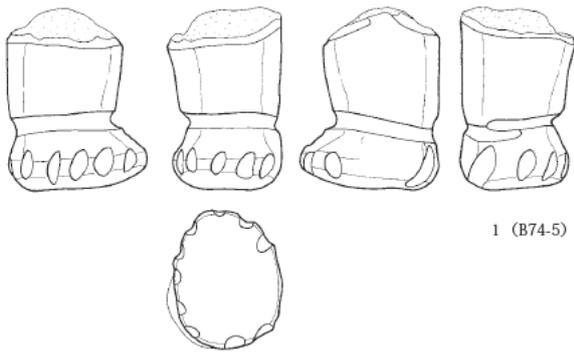
* () は現存最大値を示す

* (※)「C20 ~ 21」としたものは、集積・混在の結果判定不能になっていたため、一括で取り扱った一群。



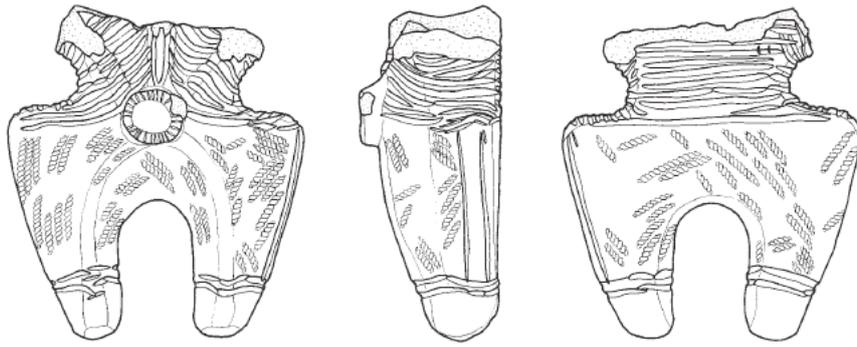
第8図 土偶・土製品(1)

*括弧内は管理番号を示し、後掲リストと符合。

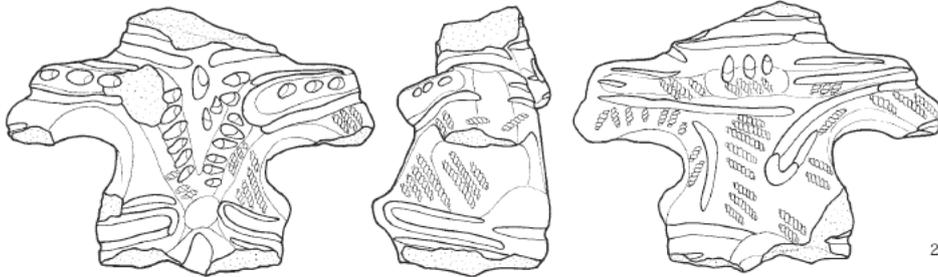
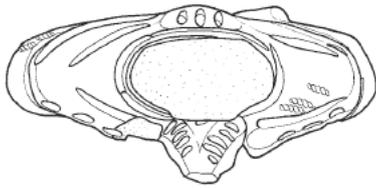


0 5cm

第9図 土偶・土製品(2)



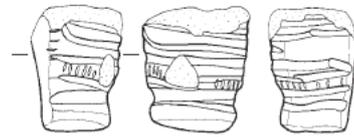
1 (B42)



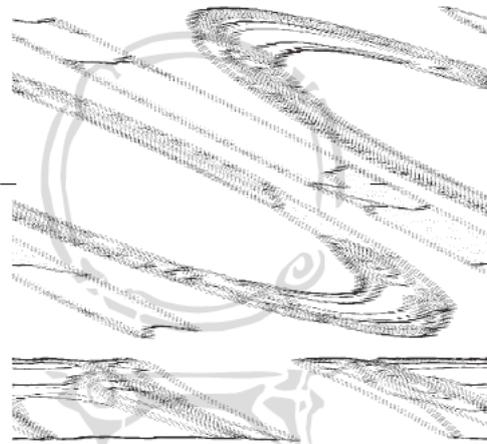
2 (B67)



3 (B74-13)



4 (B74-14)



5 (C5)



■ : 赤彩範囲



内面文様の模式図

第10図 土偶・土製品(3)